



特集
土木遺産Ⅱ
時を超える技術者のこころ イタリア

Special Features
Engineering's Heritage Ⅱ
Engineer's Feeling Surpassing the Time Italy



Villa Lante ランテ荘

幾何学的庭園に隠された遊び心

ローマ帝国時代、ローマを流れるテベレ川の右岸一面は湿地帯であり、居住には適さない地域が多かった。このため上流階級の人々は、住まいを郊外に求め、周辺に小作人を置き、農作物を栽培させながら生活していた。これらの住まいは、ローマ帝国崩壊後、社会環境の悪化などから、新しい建物に建て替えることなく、修復



を繰り返しながら使用されていた。

1500年代に入り、時代の変貌とともに貴族や教皇などの財を有するものが現れると、まずローマの南に位置するカストリロマーニ地域に、「ヴィラ(villa)」と呼ばれる別荘が作られるようになった。これらは、ローマ帝国時代に作られた古代遺跡の廃材を再利用して築造された。

ランテ荘は、このような背景の中でローマの北90kmに位置する都市ヴィテルボの廃墟を利用して作られたヴィラの一つである。

ヴィラは、当時狩りのために建てられた小屋から発達した。ランテ荘もまた当時の司教たちが利用する、狩場の雨宿り小屋として建設された。

現在のランテ荘は、イタリア式庭園と2棟の別荘からなり、建物及び庭園は正門を軸に左右対称で構成されている。正門から見ると全体が“舞台”、左右の建物が“楽屋”として捉えることも出来る。建物最上階からは今も古都の風情を残すローマ郊外のパニャイアの町並み



が一望出来る。

ランテ荘は、当時この地区を統治していたガンバラ枢機卿が当時多くの庭園を設計したヴィニョーラ(1507～1573)に託して1560年代後半から約20年の歳月をかけて完成させた。

1——地形と融合した庭園

イタリア式庭園を有する他のヴィラ(ローマ郊外のエステ荘など)とランテ荘との違いは、ランテ荘が地形の改変を極力抑え、地形を有効に活用していることにある。

庭園は山腹の斜面を巧みに使い、上段のテラス園から中段を経て、最下段に一辺が50m四方の主庭園が配置されている。庭園には草花が一切なく、樹木のみにより構成されている。

またランテ荘の庭園には、他のヴィラの庭園にみられないものの一つとして、当時のままに保存されたトーベアリ(幾何学的な植栽刈り込み)が挙げられる。他の庭園では代々所有者が変わるに連れて手を入れられて形を変えたが、ランテ荘では、建設当初からのデザインが今も残されている。

2——水による巧みな演出とその建設技術

ランテ荘には、地形と豊富な水、またそこから生まれる水頭差を使った様々な演出装置が組み込まれている。最上段の庭園では、両サイドの屋根から並んで放出される噴水により虹が現れる。また庭園上段にある



水階段は、世界でも有名なカスケードの一つに挙げられ、横浜の山下公園にもそのレプリカが設置されている。中段には“カージナルのテーブル”と呼ばれる中央に水槽が設けられた石卓が配置され、果物や飲み物を冷やして客をもてなした。下段の主庭園中央には、豊富な水量の噴水が配置され、階段の手摺や大小の彫刻の口からは水が噴き出す。

また、豊富な水を利用した“いたずら”等が随所に細工され、招待客などを十分満喫させる工夫がなされている。ある一箇所に客人を誘い込むと、そこを囲むように設置された路面と手すりに空いた小さな穴から突然水が噴きだし、客人の身動きがとれなくなるなど曲水のような水遊びが仕掛けられている。

当時の技術者は、上流階級社会の贅沢さを競い合うために、当時の先進的な技術を駆使し、網の目のような管路配置、止水性の高い管路接続や微妙な水量調節等をやり遂げていたに違いない。

この網の目のような管路は、現在、まだ一部しか修復が終っていない。近い将来、建設当時の水の“いたずら”が再現されれば、さぞかし楽しい土木遺産になることだろう。

(参考文献)
1) 造園の歴史Ⅰ：岡崎文彬、同朋舎出版、1981.11
2) パニャイアのランテ荘 Arch Giovannino Fatica



- 写真1[前頁上]— 左右対称に配置された庭園
- 写真2[前頁左下]— 欄干から噴き出す水のいたずら
- 写真3[左上]— 虹が現れる軒からの大噴水
- 写真4[右上]— ザリガニをモチーフとしたカスケード
- 写真5[左下]— イタリア式庭園と中央噴水
- 写真6[右下]— 客が囲まれ動けなくなる噴水

(写真：1、4、初芝成應 2、米岡 威 3、5、塚本敏行 6、小松豊)